ニーバーの「皮肉」について

オーテス・ケーリ
Otis Cary

『アメリカ史の皮肉』(Reinhold Niebuhr, *The Irony of American History*, New York : Charles Scribner's Sons, 1952) はこんにちの世界の状況におけるアメリカの位置を取扱っている、有機的な構成をもつ、小さいが重要な試論集である。これは現代のアメリカで最も尊敬されていながら最も理解されていない思想家であるラインホールド・ニーバー (Reinhold Niebuhr, 1892—　) の著作である。アメリカの二つの大学でなされた二回の特別連続講義がこの本のもとになっている。この試論集の持つ重みは、アメリカに対し、その伝統と歴史を背景に置いてなすところの徹底した、印象的な批判である。これはアメリカの良心を起こすべく時宜に適った書でもあり、アメリカの内側にいるアメリカ人以外にはとてもものすることのできなかったものであろう。もしも国家が或る思想家の考えによって動かされることが可能であるとすれば、それはまさしくこのような労作を通してである。というのは、この本は単なる「問題作」、「分析において徹底的」、かつ「最後的な効果において建設的な」ものであるばかりか、遙かにそれ以上のものだからである。何となれば本書はアメリカ史を究極的な文脈の上に立って、「その面前ではもろもろの国びとといえども『桶のひとしづくのごとく』にすぎない神の威厳について、また『もろもろの君をなくならしめ、地の審士

をむなしくせしむ』る神の裁き」[1]を背景としているからである。この神の威厳と裁きは聖書的信仰によるのである。ニーバーは近代のどの思想家よりもこの聖書的信仰を中心的な位置に返したといえる。

ニーバーのいわゆる「皮肉」の概念は新しい深みを持つ。これは絶えずニーバーの思想の一部をなしている強靭な弁証法から来るのである。この弁証法がニーバーの思想を先ず非常に理解しにくくさせ、次に一たん理解すると非常に喜ばしい刺戟を与えることになる。彼の弁証法の振幅についていくためには、彼の前提を理解しなければならない。彼の弁証法を充分に理解するには、彼の前提の根本にあるものを取入れ、共感し、かつ信ずる必要がある。その前提こそがキリスト教に深く根をおろしているのである。このキリスト教信仰は「イエスと名附くる人物が、歴史の中の特定の時に特定の場所においてあらわれたところの歴史の中の人間以上のものであること、その上彼は、自我と存在の究極的な神秘の啓示であるということ、この命題にもとずいて立ち、あるいは倒れるものである。」[2]ニーバーの弁証法は、聖書が豊かにその材料を提供するところの人間の自我と存在、「人間の本性と運命」、を取扱うのである。人間に絶えずつきまとうこの対立から来るディレンマには、キリストのみが解決を与えうるのであるが、近代人はキリストに背を向け、「歴史によって救われるという曖昧な結論」[3]に到達した。しかしニーバーは、歴史に拠る救いがないと同時に、歴史からの逃避に拠る救いもありえないと主張する。「全歴史にゆきわたってキリスト教は動いているが、キリスト教は歴史の上に立つもう一つの次元を持つ・・・」[4]と同じように、人間も歴史の中で動きながら歴史の外に立っている。ニーバーはこのわれわれ人間の二また的な状況に絶えず同時に接近するのであって、これが彼の思想の鍵であるともいえる。彼は絶えずあれか・これか (either/or) 式の解釈を斥け、あれも・これも (both/and) 式の立場を取りたがる。彼は二つの対立的な考えを出しながら、その二つを含みつつそれらを説明するジンテーゼを提供せずに、その二つの間の、より深い隠れた関係を提供し、その隠れた関係は異った次元の上に立つことになる。こ

れが、彼がこの書物でいう「皮肉的」な次元である。ニーバーによると、聖書における皮肉的テーマの最良の例は「神は高ぶる者を拒ぎ、謙だる者に恩恵を与え給う」[5]という聖句にあらわれている。このような神の性質と、人間としてのわれわれに避けがたくまつわりつくプライドにわれわれが捉えられていることを理解するとき、そのときにこそわれわれはニーバーのいわんとする「皮肉的」な面と、彼の弁証法をみきわめうるのである。

「皮肉」(Irony) は英語では文学の分野においてさえこの次元に立って解釈されたことはなかったと思う。私の知る限りでは、これが「皮肉」という言葉の社会科学の分野に適用されたはじめての場合である。というのは、ニーバーはアメリカ史を取扱うにあたって、その文化的・宗教的伝統だけでなく、その経済、政治、外交面までをも取扱うのである。私の理解するところでは、「皮肉」という言葉は "cynical" や "sarcastic" という言葉に隣接するか、あるいは俗語のンヴェルでは喜劇的な仕方で "satirical" に接近する。明治維新後に "Irony" に対応する日本語を作る必要を迫られたとき、英語 "sarcastic" の語源にあたるギリシァ語 σαρκασμός[6] の語幹を取ってこれにカワとニクをあらわす漢語「皮肉」をあて、結局これらが都合よく対応することになったのだと想像することができる。ここで "Irony" のために新しい言葉を作ったり、片仮名でアイロニー（もしくはイロニー）とわざわざあらわすよりは、もとの英語においてさえニーバーが社会科学の分野でこの言葉を使う冒険をした以上、日本語でも「皮肉」の定義を拡張して差支えないように感じる。「皮肉」という言葉が社会科学の分野において意味のある言葉になってくるならば、『アメリカ史の皮肉』がおもに負うことになるであろう。少くとも社会科学がいま直面している段階では、自我、あるいは人間というものを含めた、さらに包括的な見方をしなければならない。社会科学の分野では政治学が社会科学の範疇から最も分離しやすいものといえるかもしれない。なぜなら政治学は人間が物質面で必要とするものと、人間の根本的な性質との組合わせを取扱う学問であるから。心理学者（または社会科学者）でさえもこの人間の

根本的な性質である自己追求性を変えるわけにはいかない。「次の事実、すなわち自己追求という現象は不安定の特定のかたちとかかわるのでなくして、生活そのものの不安定とかかわっているという事実は、最もしゃれた（sophisticated）心理学説においてもぼやかされているように思われる。これがために心理学の諸理論が政治理論に無関係なのである。[7]」

人間を「自由でありながら縛られている」、「制限されていながら制限を超えている」と記述する最良の弁証法的な思想家がここに存在する。彼は複数的に、しかもそれぞれを極端までつきつめて考えるのである。また、彼は対立する極端を身に泌みて感じ、この両極端の緊張の上に秩序を見出す。彼によれば、時と永遠が人間の中に緊張しているのであって、「キリスト教の信仰はこの悲しみ〔人間の試煉、義務、悲劇的な選択〕を通してのみ救いに到ることを知っているが、この悲しみを回避するとき、そこには何の救いも存在しないのである。[8]」これは神学的な発言であって、社会科学者を混乱させる。なぜならこの発言は、自分で見たり、量ったり、分析したりしている社会の事実の外にみずから立つことができるとする社会科学者の確信に挑戦することになるので、この考え方は社会科学者には最後的には認められないことになるからなのである。社会科学者たちはニーバーの弁証法をもって問題に接近しはしない。彼らはその研究において、人間とは――自分をも含めて――常にその問題の中では被造物（creature）でありながら創造者（creator）であることを、口先でしか言うことができない。と同時に、問題の事実から自己を全く分離することは不可能であるということを言わない。社会科学者たちがこのことを認めえないという事実が、彼らの状況をなおさら「皮肉的」なものにするということができる。

いいかえると、社会科学者の理性は、完全には人間を、事物を離れて見るという立場に置くことができないのである。そしてその理性は「無意識的にエゴイズムの道具立てになる。理性はエゴイズムを超越しているつもりで、〔かえっ

て」それの手先になるのである。そこが問題である。理性のこの根本的かつ致命的な無能力性は、帝国主義、行きすぎた物質主義、階級的な搾取、そしてプロレタリアートの抵抗や社会主義の含む権力へと、具体的なかたちを取っていくのである。[9]」ここにまたニーバーの弁証法の振幅の全貌が見える。これは自由主義的(liberal)またはブルジョワ的な社会や、社会主義的または共産主義的な社会の持つ根本的な前提を、ともに同じ厳正さでもって覆えすのである。ニーバーは人間が「人生の中心に挑戦するということ以下のところで救いの工夫を見出してはならない[10]」と主張する。理性を用いてはならないとはもちろん言うわけでないが、しかし、理性が、複雑な人間の自我の外のどこかに悪の源があるというまちがった考え方を認めるまで、彼は理性を「皮肉的」な範疇の中に置くであろう。これは神学である。ニーバーは神学に関して書くのでなくして、神学を書くのである。なおかつ彼はそれを、われわれの生活の最も緊要なところ――つまり、実存的な段階――にまで持ち込んでくるのである。

このように「皮肉的」なひとつの次元に立ってニーバーが書くものは、社会科学者たちの間には既に学究的な関心を喚び起こしている。彼のいわんとする「皮肉」の概念に含まれたこの次元を理解することのできなかった批評家の一人は、「彼はあまりにもたやすく歴史上の一般化をその文脈から抜き出してきて、それを絶対的なものに変形する[11]」と、非難している。なおニーバーはマルクス主義者と同じくらいにきびしく社会における階級の問題を取扱い、社会的ダーウィン主義者と同じくらいに「国家に人格、さらに良心を持たせようとする[12]」といって非難されるのである。

社会科学者たちはたいがい宗教が社会科学にかかわることを簡単に否認する。過去における宗教の行きすぎのために、彼らは宗教や神学の事柄についての知識の欠除を強調するところまでいく。しかし彼らはニーバーほどの宗教的思想家を注目したり、彼の著作からヒントを得ることは喜んでする。そこで一九五二年にアメリカの新進気鋭の歴史家の一人は南部史学会(Southern Historical Association)――アメリカの数多い地方史学会のうちで最もすぐれた

一つ――の会長就任演説を、「南部史の皮肉」という題で行った。これはニーバーの「皮肉」のテーマを著しく効果的に応用して解釈を試みたものである。しかしその中でこの歴史家は言っている。「人間の志向に関するニーバーの見解が、私の分野をはっきりと超えた、神学という主題に基礎を置いていることを私は知っている。この見解の神学的な意味が何であろうと――実は、私はこの意味を調べたことはないが――その見解はそうした意味とは無関係に、歴史家に訴えるような或る妥当性を持つのである。しかも、歴史を皮肉的に解釈することは稀であり、困難である。[13]」そして彼は、「皮肉的」な歴史観を打ちたてる要素がアメリカの南部の悲劇的な歴史において特に目立つことを巧みに述べるのである。また「皮肉的」な歴史観をもって物を掴むことのできる人は歴史家として特に望ましい、とも述べている。しかもこれは社会科学の中で最も非社会科学的な分野である歴史を担当する学者の言っている言葉なのである！　けれどもこのような理解と利用の仕方でさえもよほど例外的であって、ほとんどの社会科学者たちはニーバーの鋭くて、しかも徹底的な社会批判のために彼を長敬しているだけである。つまり彼の著作の皮相な半面のために。

＊　＊　＊

キリスト教以後の時代（post-Christian era）に入っているといわれる西洋で、この二十五年間に、ニーバーはみずからが知識人の世界に占める位置と立場から、キリスト教に知的内容を持たせ、彼があらわれなかったら結局持たずに終ったであろう人々にキリスト教への関心を持たせるのに偉大な役割をはたしてきたにちがいない。彼の生涯のあらましは日本ではいくつかの箇所に発表されているが、根本になる事実は次のようなものである。

ニーバーは一八九二年にアメリカ中部のミズーリ州でドイツからの移民であった牧師（German Evangelical Church 所属）の家に生まれた。エルムハースト学院（Elmhurst College, イリノイ州のシカゴの郊外にある）で高校時代をすごし、イーデン神学校（Eden Theological Seminary, ミズーリ州のセント・ルイス市のすぐ郊外にある）に三年近く学

び、それからイェール大学の神学校（Yale University Divinity School）に移り、そこで一九一四年にB.D.を、一九一五年にM.A.と、はじめての学位を取った。Ph.D.の博士号まで勉強していくつもりだった彼は、当時のリベラルなイェール神学校の空気が問題はずれのような感じがして、M.A.でやめてしまった。そのままデトロイト市郊外のベセル福音教会（Bethel Evangelical Church）に派遣され、当時自動車工業の発展のために拡がりつつあったデトロイト市の人口増加率の二倍の率で、教会を成長させた。ここで十三年たってから、一九二八年にニュー・ヨークのユニオン神学校（Union Theological Seminary）に招かれ、種々の講座を担当して現在に至っている。スコットランドのエジンバラ大学のギフォード・レクチャーズという特別講義（これは西洋で最も有名な講義の一つである）に招聘されたことが、この間の頂点の一つである。現在ではユニオン神学校の応用キリスト教神学を担当し、なお同校の"Dean of the Faculty"[14]である。二年前に二回軽い脳溢血を起したにもかかわらず、今学年は二つの講座を担当している。彼の文筆活動はあいかわらず数多くて、キリスト教関係の雑誌のみならず、思いがけないような雑誌にも顔を見せる。この夏のエヴァンストンでの第二回世界教会協議会で行う予定であった演説は、聖公会のベル監督が代理で朗読した。

ニーバーの数えることのできないほどの活動のうち、彼の政治的、社会的な運動、所属した団体、政党、委員会の、アメリカの歴史における位置を充分に記述する必要があるが、その大部分をここでは割愛し、ただ列挙するにとどめる。しかしこれはそのうちに充分になされなければならないことである。

ニーバーとアメリカの社会党との関係は、一九一五年から一九二八年のデトロイトにおける牧師時代にさかのぼる。一九三〇年に彼はFellowship of Socialist Christians[15]という団体の設立の中心人物となり、その季刊雑誌Radical Religion (1935–40) の主筆をつとめた。これは一九四〇年にChristianity and Society (1940–　) という雑誌にな

って続いたが、この雑誌においても彼は現在にいたるまで主筆である。この団体の名も一九四七年に Frontier Fellowship とかわり、一九五一年から現在にいたるまで Christian Action となって続いている。一九三〇年代にニーバーは The World Tomorrow というアメリカの社会党の機関紙の編集者であったが、一九四〇年六月に社会党を脱退した。ヨーロッパで始まっていた第二次大戦におけるナチズムに対する態度で意見を異にしたためである。一九四一年二月には Christianity and Crisis という隔週に出版される論説紙をはじめた。これはニーバーの名を一般のインテリ界と結びつけるのに最も貢献したといわれる。彼はいまでも同紙の主筆であって、殆ど毎号寄稿している。これは彼が学園の中だけにとじこもらないで、現実社会の大問題と取組んで働こうとする熱烈な精神を代表しているといえる。一九四一年にはこの Christianity and Crisis をはじめるために、あそこまできた非キリスト教的専制（つまりナチズム、ファッシズム）を戦争よりも悪であると考え、なお「全体主義的侵略を阻止することが世界の平和と秩序の前提」であると信じる有名な聖職者たちが集ったが、彼はそのグループの中心だったのである。ドイツでの人権の侵害、またナチスの反ユダヤ政策を大目に見ることのできる、単純でセンチメンタルなキリスト教に対し、この論説紙は絶えず挑戦してきた。また最近では、キリスト教は資本主義の後援に立っていると述べたがる、ナイーヴなキリスト教観と堂々と戦っている。

一九三〇年代の末から四〇年代にかけて、ニーバーはアメリカで相当有力だった二つの委員会の委員長をつとめた。その一つは American Friends of German Freedom（これはヒトラー反対運動を応援するためのアメリカに於ける団体である）であり、いま一つは Union for Democratic Action（主として、もと絶対平和主義者だったが、いかなる形の全体主義にも対抗してアメリカはイギリスを援けなくてはならないと主張する人々によって組織されていた）である。

ニュー・ヨーク州は――特にニュー・ヨーク市は――その地で割合に影響力のある自由党を持っている。戦時中ニーバーは、労働者を基盤としたこの自由党とよく提携した。一九四四年にはその党の副委員長までつとめた。彼の働き場所は、絶えず非共産主義的左派のぎりぎりのところであって、このことはたとえ彼の長年にわたる社会主義の背景から明らかでないとしても、彼の深いキリスト教信仰からは明らかな筈である。彼は Americans for Democratic Action に第二次大戦後の設立当初から参加しており、その副委員長をつとめているが、これは進歩的な政治色を持つ全国的な団体である。また戦後 Resettlement Campaign for Exiled Professionals と呼ばれる、亡命の医師、法律家、科学者、芸術家、作家たちを、紹介し配置する仕事に従事するグループの委員長をつとめた。彼はなお、さきに述べた Christian Action という団体の中心人物であり、それの委員長をつとめている。

ニーバーは一九三〇年代、四〇年代にはアメリカの進歩的な雑誌である The Nation と、プロテスタントの方で最もよく読まれている Christian Century の編集委員の一人であった。また第二次大戦後ユネスコのアメリカ代表の一人になったこともあるし、またドイツ占領の文化政策の顧問として国務省にも相当重んじられていた。キリスト教の組織の中ではもちろんいろんな重要な委員をつとめてきたが、中でも世界教会協議会での彼の活躍ぶりは特にめざましい。これらのことを、一層くわしくかつ徹底的に、アメリカ文化の様相を背景としながら語る必要があるが、ここではこの程度にとどめたい。

* * *

ニーバーの政治と社会に対する実践的な関心の強烈さと幅とは、以上のような概観からして明らかである。なお、彼の二十冊に及ぶ著書のタイトルに目を通すことは、彼の思想と関心がどのあたりにあるかを理解するのにいま一つの助けとなるかと思う。『キリスト教信仰と社会的実践』は彼と一緒に長年活躍してきた人たち、あるいは彼のもと

に学び、今は方々で立派な地位についている人たちが寄稿し、昨年出版された試論集である。ニーバーはこの本の最後の論文（そのタイトルは「キリスト教信仰と社会的実践」で、本書の名はそこから来たと思われる）の筆者であるのに、デディケーションは"To Reinhold Niebuhr, Christian, Theologian, Prophet, Statesman"となっている。これはニーバーの"Festschrift"として予定されたものであるのに、彼は自分ではそれと知らずに寄稿したのである。[19] 自分にデディケートされるとは彼は夢にも思っていなかった。彼は本をもらって、はじめてそれを知ったのである。ニーバーのキリスト者としての、また神学者としての資格はいうまでもない。ステーツマンとしてのニーバーは理解しがたいかもしれない。しかしそのステーツマンシップは、キリスト教の内外にわたって絶えず福音と社会を結ぼうとしてきたことが、結局政治の最良の在り方を意味しているからであると思う。

予言者というと深い畏敬の念を起させるような容貌が目の前に浮かんでくる。確かにニーバーの眼は人の心にくいるような感じを与える。そしてこれが彼のしんじつの暖かさを時として欺く。けれども、やがてその下から、暖い、同情に富んだ、落着きを与える、人の問題に関心を持ってくれる、衒いのない性格があらわれてくる。

予言者と呼ばれることは偉大なことであり、大変なことである。しかしニーバーは予言者として知られているし、また知られるべきである。彼は独得な意味で二十世紀の予言者である。現代では予言者は止むことを知らずに予言し続ける革命家（perpetual revolutionary）でなければならない。近代は多くの革命家を産出した。しかしそれぞれにそれぞれの目的があって、その目的に到達するところまで事がうまく進む場合、彼は革命家でなくなるのである。真の予言者は絶えず革命家である。彼は現実に充分根をおろし、実際の状況、すなわち実存的状況に徹底した知識を持つからこそ叫ぶのである。実存的に現実を知っているからこそ、人が聞こうと聞くまいと、叫ばざるをえないのである。彼は現実に充分まきこまれているから、それに深い同情をもつ。しかし予言者は同時にまた、物事をすっかり離れて

見る立場にも立つことができる。すなわち予言者の充分に把握していることは「物事を離れて見る能力と、共感する能力との非凡な結合[14]」である。「彼は・・・徳や強みの要素を否定するほどにまで敵意を抱いてはならず、また、その徳と強みが賦与したところの虚栄と弱みを無視するほどにまで同情的であってはならないのである。[15]」いいかえれば、予言者は「皮肉的」な状況の両要素を充分に摑むことができるのである。その上彼はその「皮肉」の彼方にあるものを見ることができ、それを正しい究極的な遠近関係に置くことができる。これは神の威厳としか名附けられない。そして彼はこの遠近関係のはかりでもって、われわれが創ろうとする歴史を量るのである。それ故ニーバーは「〔日本とアメリカを〕共に結びもし、また分ちもしてきたところの非常に独得の歴史[16]」について語る。彼は続ける。「或る意味で私の期待するのは一般的な相互理解に対する貢献ではなくして、むしろ、キリスト教信仰の枠組のなかでの理解への貢献なのである。聖書的信仰は・・・神の威厳について・・・知っている。この威厳を知ることによってのみ、私自身の国アメリカのように強力となった国々のプライドをへりくだらすことができるのだと私は考える。それ故私は、今見るような世俗的な諸傾向のかわりに、この宗教的明察力とでもいうべきものが、わが国の文化にみなぎりゆくことを望むのである。さもなければわれわれはみかけの成功によって堪えがたいプライドにおちいり、かくてわれわれの究極的な敗北への基礎を置くことを私は確信する。これこそまさに『皮肉的』なのである。[17]」

このように、ニーバーは自分の言葉で叫ぶ。彼の名とともに引合いに出される古い十六世紀の讃美歌の一節をもって、二十世紀の予言者ラインホールド・ニーバーについての小論を閉じる。

帰り来よ、おお人よ、ながおろかなる道を棄てよ
地はふるくなれり、誰か地につける日々を数えん

それどころか、地の子よ、そのこうべには火をいただき
内なる神の呼び声を聞かんともせざる――
「帰りこよ、おお人よ、ながおろかなる道を棄てよ。[15]」

註① ラインホールド・ニーバー著『アメリカ史の皮肉』の日本語訳（社会思想研究会出版部刊、オーテス・ケーリ訳）に著者より送られた「まえがき」より。

② 一九五一年二月五、六、七日、イエール大学の Battell Chapel におけるニーバーの連続講演における筆者のメモおよび TIME, Feb. 19, 1951 の記事より。以下便宜上、この講演を「イエール講演」と略記する。

③、④ 「イエール講演」より。

⑤ ペテロ前書五章五節、ヤコブ書四章六節。

⑥ Webster's New International Dictionary of the English Language, Springfield : G. & C. Merriam Co., 1927 によれば、sarcasm . . ., n. [F. *sarcasme*, L. *sarcasmos* . . . to tear flesh like dogs, to bite the lips in rage, to speak bitterly, to sneer, fr. σάρξ, σαρκός, flesh] . . . 1. . . . also, irony or the use of irony . . .

⑦ Reinhold Niebuhr : *Christian Realism and Political Problems*, New York : Charles Scribner's Sons, p. 9.

⑧ 「イエール講演」より。

⑨ D. R. Davies, *Reinhold Niebuhr: Prophet from America*, New York : The MacMillan Company, 1948, p. 36.

⑩ New York Times Magazine, Nov. 11, 1950.

⑪ R. G. Cowherd in *Annals of The American Academy of Political Science*, September, 1952, p. 200.

⑫ 同書。

⑬ C. Vann Woodward, "The Irony of Southern History," in *The Journal of Southern History*, Vol. XIX, No. 1, February, 1953, p. 7.

⑭ アメリカの教育制度の中で使われている種々の用語の中には、対応する日本語のない場合がある。この Dean of the Faculty もその一つである。ユニオン神学校はコロンビア大学との一種の協同組織のもとにありながら別ったる理事会のもとに動いて

いる。独立した単科大学のような形をとりながら、コロンビア大学の神学校の役割をはたしている。コロンビア大学にもユニオン神学校にもそれぞれ President がある。ユニオンではその President の下に Dean of the Faculty があって、これはユニオンではニーバーのためにはじめて設けられたもので、教授たちの間で最も名誉なポストとみなされている。ユニオンの President も「総長」と呼ばれるべきかもしれないが、単科大学なら「校長」の方がいいふもしれない。もし「総長」にすると、Dean of the Faculty は「学長」というべきであろう。

⑮ この世俗的な世の中で、これはよくまちがえて Fellowship of Christian Socialists と呼ばれている。Fellowship of Socialist Christians が正しいのであって、その中の Socialist Christians が大切である。つまり、ニーバーが意味してきたことは「キリスト教に関心ある社会主義者」でなく、「社会主義に関心をもつキリスト者」なのである。

⑯ このデディケーションには珍しい、しかも心を暖めるようなつけたしがある。ちなみにここに紹介しておきたい。With the grateful affection of his fellow-workers and friends, this book is dedicated without his knowledge.

⑰ Woodward, *op. cit.*, p. 78.

⑱ 註①に同じ。

⑲ *Genevan Psalter*, 1551 in *Hymns for Worship*, New York: Association Press, 1943. No. 92. (この歌の訳は北垣宗治氏による)